

晃月神諭

平成十年八月

—

第三集

平成十七年二月

神をなんと思うてる

人間の

世界は神の一部やで

水の神

じきもつの神

やがて手を引く

その時に

何が守るか思案思案や

諭しは諭し

なれど行なくば諭しとは言わん

(980801)

親神は天地の大神様なるぞ

二つ一つで三千世界

しゆくする神に八柱立てて

天地輪王みぎひだり

(980809)

これまでは

神のうけとりでけんほど

誓いのうすい願ひ千筋

いまなるは

神のはたらき忘れさり

神をうけとる器なし

そのよなものか世にみちて

世界ささこえる

神の手しりぞく

(980823)

ひとびとと

いうて違ふはただ一つ

みのうちは

ふうふそろうて守護をして

遠き近きの区別なく

霊止を助ける

日止霊止の道

これせいじんの道

(980906)

えびすたいこくみぎひだり

美しきすべてのものやかたちには

神のおもわくこめてあるなり

きたみなみ

ひがしやにしや天や地や

そのそれぞれの一ごとくに

やくめおもわくしらしあるなり

(980908)

神がはいた
悪魔がついた
などとさわいでいるけれど
およそ世界は
先半分闇が半分

今なるは
日月星々闇照らす
神々力失うて
人間闇をさ迷うている
神も悪魔もそのような
人間みさだめ動かしてゆく

(980909)

いくら装いこらしても
生まれつづける真実の
まことなければ
それは悪の魔
つぎつぎと

厚い化粧や華美な事
重ね続けていくならば
信神人しゆうあくばかり
神のおもいは
消えうせて
人のおもわく
紙にあふれる

(980918)

神のおおもとニツて一ツ

一ツ二つの神出して

やがてこの世の守護いで

靈止のみようらく

神ぞうれしき

やがておりおり

説いてきかして

神々は

靈止のみようらく

ささえてきたが

神々ころして魔の闇に

快樂求めてさそわれて

いばらいばらと

どろの海山

やがてゆく

神もとのみち

知らずして

靈止が靈止喰う

世界つくつて

光のみちへもどらねば

もどすほかなし

そのときに

神をおがんでいたとても

闇はやみなり

光はひかり

神はかみ

ひとりひとりに

かみのしゅい

あたえてみせてきたけれど

さかきすらもまちがえて

神のさかきをうけいれて

闇の大王そだてゆく

どろの海山

さえるなら

ニツ一つに神ははたらき
やみは光へむかうだんどり
今のとき

どろの海山けすために
一ツ二つに神はよういぞ

神の子よ

ニツ一つか一ツ二つか

どろの海山みて

いまきめよ

(981016)

こどもらを

しかる親はいたとても

こどもらに

つみはつ難儀与える親なし

そのよな親はあくま神

神々は

神の子兄弟たすけ一条

なれど神

こどもみさだめ

試練与える

(981025)

種まけば

もとの実のなる

種をもとめよ

(981024)

一日を

千日にしてすごしても

心たおせばもとのもくあみ

いくら神仰ちこうても

心得違えば

でなおしとらう

(981102)

よろづよの
人の世をかまみてみれば
神々の姿うつつてみえるものなり
大神のまははみえぬようなれど
このもとたずね
きいてみるなら

(981109)

大神の
おもいぞふかく知るならば
うそもまこともみなわかるものなり
大神があれせこれせというはなく
ひたすらことどものいこえみている

神々もとわれるならばいたえても
あれせこれせというはなし
神のいしゆいがあるひとは

神にたよるは一もなく
唯々神々のりまいらせ
心言行を神にまかせる
神々のいように生きる日止靈止は
唯ひたすらにたすけ一条

神の名で講をむすんで
あれこれと
どうせいこうせいこれに神なし
みょうらくに
せいしんの道ゆくならば
ふしぎなたすけいつもあるなり

せいしんは
性正成に誠聖の人

(981218)

神々の

栄光の中ゆくものは

一騎当千のものをいふ

大神と親神様の栄光が

みちてこの世は生きてゆくなり

(990114)

神のはからいは

この世の全てを治め

神の光をうけずして

日止霊止とはなれない

(990119)

日止は

おのれの喜びのために

霊止を苦しめる事はない

日止は神の目をおそれ

霊止はいまだ

(この世の目と口をおそれている) 990119)

神のみち

ただおがみきとうと思つてか

いのちうけもつ神のまだうえ

こころでみがけば

みえてくるなり

(990220)

神のはたらき

大中小

一ツ世界の大きさと

二ツ世界の確かさが

神のしゆくをば

決めるものなり

(990309)

初七日や

四十九日や

何年や

これ仏法のととしなり

神ふところにくれらなく

日々まいらせて

祀るなり

祖霊三代祀るなら

祖霊神々うけとりて

神々様と勇むなり

戒名も

人の名付けはいらんもの

だれがだれやら

神仏わかるで

(990318)

毎日を

行事行事にする事が

神のおもいにそうのやで

家族だんどり

これ第一の行事なり

家族が神の世界なら

何不自由なく一の力で

およそばんじが進みゆくなり

(990401)

心のおんしんたんのうと

確信もちて生きるなら

神のおたすけばかりなり

心に不安いかりや

とまどいみせた事ならば

それみてまもの

よつてくるくる

(990413)

たすけもとめてくるまえに
みのうちのあくようく思案せ

その思案

反省こめていのるなら

その心根に神がこたえる

(990415)

のりとは

宣言と祝詞二つあるなり

晃月のりとこれ宣言

もつまわった言い方や

複雑なものなにもいらんが

しつかりと心根みせて

のりあげよ

(990511)

ありのまま心すましてうけとりて

段々段とゆくならば

ことの真実見えてくるなり

(990513)

真実と実というて違うのは
一つかくれてあるが真実で
つくしはこびは実の事なり

(990511)

地の月の

神の諭しというものは

神行あればみなおなじ

くりくりかえし

真実の

意味と力をもつように

出してきたれど

みなみなが

勝手都合に読んで誤り

説いてまものを育てゆくなり

神のみわざは実のとい

知ればかたん

みきぎでさるで

所作と金とを

みよだめて

何がもとやら

みえてくるくる

(990529)

昼にこそ

ヒトのまく種育つなり

なれど霊と日は

夜に神が手入れを

(990613)

あらためて言う

種まけば

元の実のなる

種をもとめよ

(990529)

神の日の三の日の

神の思いを

しかと伝えて

(990620)

もとの実と風

不二の如くに

淡々段々

(990529)

神がその子である

霊止日止を苦しめ

こまらせる事はない

あなたがたにもとの原因がないかぎりは

(990703)

まいた種

罪と咎とがあらわれて

すぐにおのれの罰を決め切れ

悔いてばかりでいるならば

罪と咎とは繰り返す

あらためて罪をあがなう事

日々を神に向うて行く事

これなくば

やみも光もうせてしまうので

(990705)

昼にこそ

人のまく種育つなり

なれど霊と日は夜に

手入れたんせい

(990820)

日水風の御すがたは

不二のごとくに淡々段々

(990820)

いずれ世界がよりくるならば

いかなものでもしかと見せるで

なってくるだけ心から

喜びうけてとうるなら

思い以上にあたえとらする

(990717)

悪神は

人の喜ぶ瑞兆を

みせて

己の欲をみたして

布施多ければ位は高く

神仏は

これみてないていなさるが

これまた人のじゆうよう

心に晁月もつ日止は

心つくしてどのような

雨風闇であらうとも

ただひたすらに神仏の

願いをしつ

すすみゆくなり

やさしく努力してみせて

きびしき事も

うけとりてゆけ

(990902)

大神はしもしも日止靈止

おもいつつ

かみがみゆがめる

おもい嘆いて

(990906)

神仰は

共に手をとりはげましあつ

おのが役割果たす事

神の社の第一は

神がもともと貸して与えた

おのが役割果たすには

貸した社をみがかきあげ

きたえて神座つくること

これ第一の事と知るべし

(991015)

神の栄光の元に死す事は、

神元への出直しです。

生命が肉体のレベルでのみ語られ

神の栄光の元にある事を理解するのが

極めて困難な時代にあつて、

神の栄光の元にあるためには、

神懐での出直しが必要なりません。

(991222)

このところ

天の動きは

そのままに

人の世界を映すように

晁月が恣

教えてあるが

ようやくにして

この日至りて

神がとう

くりかえしとう

心つかいのじゆうはな

はじめからの与えであるが

六の日や晁月祀の天の動きに

神の子は

ニツ一つにたえにやならん

八柱の十全は

一つニツと違うてな

ニツ一つを理となして

世界許して今があるなり

八柱の一神々々

ニツ一つに守りなす

世界はここに神のよと

ニツ一つとあいなりて一つニツと花とひらくが…

(〇三〇三〇三)

失敗は恥ではない。

当然の結果なのだから、感謝して反省するのだ。

反省は、しかし、誰にでも出来る。

感謝して本願に立たねばならない。

使命に向かわなくてはならない。

妙明樂にと教えてある。

(040224)

苦勞難儀のその元を、

よくよくみれば

我が身恨みと神のご期待

(050219)

第三集おわり